

長崎西坂のこと

愛知県立大学外国語学部准教授
谷口智子

1. 日本初の列福式

「長崎で国内初の列福式 江戸期の殉教 188 人『福者』に」、というニュースが舞い込んだのは 2008 年 11 月 24 日のことである。

「ローマ法王庁がカトリック信仰の模範となる信者をたたえ、最高位の聖人に次ぐ福者の位を授ける「列福式」が 24 日、国内では初めて長崎市で開催された。

福者となったのは、天正遣欧少年使節の 1 人だった中浦ジュリアン（長崎出身）や、日本人として初めてエルサレムを訪問し江戸で殉教したペトロ岐部（大分出身）ら、江戸初期の殉教者 188 人。法王代理のジョゼ・サライバ・マルティンス枢機卿が列福を宣言。国内外から参列した約 3 万人の信者らが祈りや聖歌をささげ、会場の長崎県営野球場から 188 羽のハトが放たれた。

式典で白柳誠枢機卿は「日本での迫害は長期にわたり、残酷さは類を見ない。殉教者は人生の意味や苦しみなど根本的な問題を考えさせてくれる」と述べ、サライバ枢機卿は「188 人がいつの日か聖人に列せられることを望んでいます」とあいさつした。〔共同〕（2008 年 11 月 24 日）」¹

列福の発端は 1981 年 2 月 26 日当時のローマ教皇故ヨハネ・パウロ 2 世の長崎訪問時に、「日本には殉教者の長く苦しい歴史がある。その信仰を顕彰するように」という一言から始まったという。列福運動は法王の来日をきっかけに、日本カトリック司教協議会が 84 年から殉教者の調査を開始。96 年にすべての調査を終え、法王庁に 188 人の列福を申請。ベネディクト 16 世が 2007 年 6 月、列福を承認した。

「今回福者に列せられた「ペトロ岐部と 187 殉教者」は江戸初期（1603-39 年）、九州や山口、広島、京都、大阪、山形で処刑された司祭や宣教師 5 人と一般信者 183 人。一度にこれだけ多くの日本人が列福されるのは 1867 年以来となる。

188 人の中には、遠藤周作の小説「銃と十字架」にも登場し、マカオへの追放後、約 2 年間かけて徒歩でローマまで向かい、「世界を歩いた神父」として知られるペトロ岐部（1587-1639）、天正遣欧使節の 1 人としてローマを訪問したジュリアン中浦（1568-1633）、大阪最後の宣教師とされているディオゴ結城（1574-1636）らが含まれている。」²

¹ <http://www.nikkei.co.jp/news/shakai/20081124STXKB017524112008.html>（日経ネット、2008.11.24）

² <http://christiantoday.co.jp/main/domestic-news-894.html>（Christian Today、2008.11.24）

日本ではこれまでに、「日本 26 聖人」ら 42 人の聖人と、205 人の福者がいる（福者は聖人の次に与えられる称号である）。彼らが聖人化、福者化されたプロセスは本稿のテーマではないので仔細は省く。

2. 「元和大殉教図」

1867 年、ローマ教皇ピウス 9 世によって、元和の大殉教（元和 8 年 8 月 5 日、1622 年 9 月 10 日）で殺された 55 人が一度に列福されている。元和の大殉教とは、江戸時代初期の元和 8 年 8 月 5 日（1622 年 9 月 10 日）、長崎の西坂で、カトリックのキリスト教徒 55 名が火刑と斬首によって処刑された事件である。日本のキリシタン迫害の歴史の中でもっとも多く多くの信徒が同時に処刑されたもので、この事件の後、幕府による弾圧は強化される。詳細がオランダ商館員やイエズス会宣教師によって海外に伝えられ、日本の歴史の中で 26 聖人の殉教とならんでもっともよく知られた殉教事件となっている。具体的には、火刑や斬首刑による迫害だが、その様子が詳細に描かれた絵図が「元和大殉教」としてローマのジェズ教会に保存されている。

今回、この秘蔵の「元和大殉教図」が列福式にあわせて、長崎歴史文化博物館で公開された。元和大殉教について、日本 26 聖人記念博物館の館長であった故結城了悟氏（イエズス会司祭）は『日本キリシタン物語』で次のように語っている。

「1622 年 9 月 10 日、長崎の殉教地西坂が忘れがたい場面を現していた。ローマのジェズ教会に保存されている 1 人の南蛮絵師が描いた絵は、細部に至るまで歴史的にも完璧である。しかし、祈りと殉教者の心を伝えたいとの思いで描かれたため、その殉教の恐ろしさを十分に見せてはいない。殉教地の一番高い所には、火あぶりによって殺される宣教師たちが並んでいる。その中には、日本人として最初の司祭であるイエズス会のセバスチャン木村とスピノラ神父³、ドミニコ会のモラレス⁴とオルファネル



大殉教絵図（ジェズ教会）

³ スピノラ神父 [1564-1622. 9. 10] 殉教者。イタリアのジェノバの名門タッサロラ伯家に生まれる。伯父フィリッポ枢機卿邸から、イエズス会の学校に通い、1584 年修練院に入り、1594 年司祭叙階。ブラジルでの宣教を望み、まず西インド諸島で宣教活動を行う。1598 年リスボンで誓願宣立後、マカオで働いた。1602 年 5 月に来日。有馬で日本語を学んだ後、有家（肥前）で宣教。1605 年京都に移る。クラヴィウス直伝の科学知識をもって小天文台を設けた。また 1611 年には、数学アカデミーを設けた。1612 年の幕府の禁教令以降も、熱心に宣教を続け、長崎奉行・長谷川権六によって捕らえられ、大村に送られた。牢の内外で声高らかに主を賛美し、捕吏たちに説教を行った。1621 年の平山常陳事件に際しては平戸に喚問されたが、オランダ人に情理を尽くした大弁論を行った。1622 年 9 月 9 日、同牢者と共に時津に舟で移送され、翌日、長崎立山で火刑に処せられた。

⁵、フランシスコ会のペトロ・デ・アビラとリカルド⁶、日見峠近くに隠遁生活をしていた5名のイエズス会の同宿などである。そして、一番下には、血塗れの地面に首が切断された宣教師たちの宿主の遺体が散乱していた。その中には、数人の韓国人殉教者もいた。この殉教の序文のように数日前同地で、アウグスチノ会のペトロ・デ・ズニガ⁷とドミニコ会のフロレス神父⁸が、船長ディアス平山とその乗組員と一緒に処刑された。この大殉教の歴史は、その船の話か

⁴ **モラレス [1567. 10. 14-1622. 9. 10]** 日本205福者殉教者の1人。ドミニコ会士。スペインのマドリードに生まれる。若くしてドミニコ会に入り、バリアドリードで教育を受け、創立間もないドミニコ会ロザリオ管区に参加するため、1597年、マニラに向かった。マニラの聖ドミニコ修道院院長に任ぜられるが、翌年の1602年、日本におけるドミニコ会布教長として薩摩の甌島に渡来した。この島や京泊（薩摩）周辺の布教に従事した。1609年、キリシタン迫害のため長崎に赴いた。1614年11月、他の宣教師と共に日本を追放されたが、あらかじめ待機していたキリシタンの小舟で長崎に戻り、長崎代官・村山等安の長男にかくまわれる。1613年3月捕らえられ、壱岐の牢に入れられた。8月大村の牢に移され、長崎で殉教した。

⁵ **オルファネル [1578. 11-1622. 9. 10]** 日本205福者殉教者の1人。ドミニコ会士。スペインのカステリョン・デ・ラ・プラーナ県ジャナに生まれる。1600年3月バルセロナで、ドミニコ会入会。翌年3月、誓願を宣立。メキシコ、フィリピンを経て、1607年6月来日。京泊や浜町（肥前）、長崎、大村、有馬、肥後、豊後で宣教活動を行った。1614年2月、臼杵で逮捕され、長崎に護送されるが、ひそかに脱出し、潜伏し、有馬、有家、口之津、筑後、豊前、日向、大村で活動した。1621年『日本キリシタン教会史』を大村で脱稿。同年4月、ドミニコ会新管区長代理選出のため長崎に向かう途中、逮捕された。大村の牢に入れられ、元和の大殉教で殉教した。

⁶ **リカルド（リカルド・デ・サンタナ） [1585-1622. 9. 10]** 日本205福者殉教者の1人。フランシスコ会司祭。ベルギーのハンス・ヘウルに生まれる。1604年、フランシスコ会に入会。翌年5月ローマに行き、アラチェリ修道院に入った。そこで、長崎での同会士6名の殉教（日本二十六聖人）のことを聞き、日本の宣教を望むようになった。スペインの聖ヨゼフ管区に移籍し、1609年多くの同志と共にマニラに赴いたが、メキシコに派遣され、同地で司祭に叙階された。数カ月後マニラに戻る。1612年、6名の同志と共に来日するが、1614年の追放令により日本を去った。1617年、再び来日し、九州で宣教活動にあたる。この時期、フランシスコ会で自由に活動できたのは、彼だけであった。1621年11月、長崎で病に倒れたとき、背教者の密告によって捕らえられ、長崎で火刑に処せられた。

⁷ **ペトロ・デ・ズニガ [生年不詳-1622. 8. 19]** 殉教者。アウグスチノ会士。スペインのセビリアに生まれる。メキシコ副王ピリヤマンリケ侯爵の息子。1604年セビリアの修道院に入会。1610年フィリピンに渡った。1618年来日し、日本語を学び宣教活動を行った。1619年5月いったんマニラに戻り、1620年6月管区長代理として、ドミニコ会のフロレスと共に商人に変装して平山常陳の船に乗船した。途中、イギリスとオランダの連合艦隊に拿捕され、平戸に連行され、身分が発覚し、1622年、平山、フロレスと共に、火刑に処せられた。

⁸ **フロレス神父 [生年不詳-1622. 8. 19]** 殉教者。ドミニコ会士。フランドル出身。1592年メキシコでドミニコ会に入会。1598年フィリピンに渡る。1606年聖パブロ修道院院長、1608年聖ビンセンテ修道院院長などを経て、カガヤン地区の管区長代理となる。1620年、迫害下の日本での宣教を志し、ズニガと共に平山常陳の船に乗った。途中、イギリスとオランダの連合艦隊に拿捕され、平戸に連行され、身分が発覚し、1622年、平山、ズニガと共に、火刑に処せられた。

ら始まる。マニラから鹿の革を積載して長崎に向かう平山船長の御朱印船が、平戸を基地にしていたイギリス、オランダ艦隊の一隻に拿捕されて平戸に連行された。積荷の隙間に身を隠していた二人のスペイン人が見つかった。役人たちは、彼らを潜伏宣教師だと思いオランダ人の牢屋に入れ、長崎奉行長谷川権六と江戸幕府に使いを出した。平戸で、長谷川権六と平戸の松浦隆信壱岐守の面前で二人の取り調べが行われた。二人の「スペイン人」は確かに宣教師であったが、この船乗りの命を救うために、鈴田の牢屋から呼ばれたスピノラとモラレスも、また捕らわれた人の1人ズニガを知っていた長谷川権六さえも、彼らが神父だとは言わなかった。しかし、背教者トマス荒木が、ズニガの身分を話した。彼は別の牢に移されたが、オランダ人であったフロレスは平戸に残された。日本に着いたばかりのドミニコ会のコリアド神父⁹は、長崎にいた数人のスペイン人商人の頼みに応じて、信者の助けを得てフロレスを牢屋から自由にしようと試みた。しかし、助けることはできず、救いに行った信者までも捕らわれの身となった。さらに、彼らが持っていたこの計画と関わる手紙なども見つけられた。コリアド神父は、逃亡に成功し日本から離れたが、このことが將軍秀忠の耳に入り、彼は激怒して、捕らえられていた宣教師や信者を処刑するよう命令した。また、コリアド神父を捜していた役人たちによって、平戸で活躍していたコンスタンソ神父とその伝道士も巻き込まれることになった。これらの殉教が將軍秀忠最後の迫害であった。秀忠は翌年、徳川家光に將軍職を譲り引退した。圧迫されていた長崎の教会にとって、多くの宣教師とその協力者の死は大きな打撃であった。さらに奉行としてキリシタンに対し、厳しい姿勢をとらなかった長谷川権六は、江戸に呼ばれた。」

10

結城了悟氏はスペイン生まれで後に日本に帰化した人で、日本で殉教したキリシタンの研究を半世紀以上にわたって続けてきた研究者である。列福式の根拠となる資料は、結城氏や日本26聖人記念館の長い間積み重ねてきた研究努力の成果でもあった。私が驚異と感動を覚えたのは、もちろん約400年前の外国人殉教者のように、日本のキリシタン殉教者に追悼を捧げ、その研究に一生を捧げ、日本の土となった結城氏その人の研究や生き様にもあるが、それだけではない。江戸時代初期の日本キリシタン殉教者の生や苦悩がある意味報われたかもしれない「列福式」にでもない。「元和大殉教図」そのものである。

「元和大殉教図」は、かつてセミナリオで絵画を学び、1622年9月22日の長崎西坂における凄惨な現場を目撃し、マカオまで逃亡し、そこで描き上げた修道士の手によって描かれたものと考えられているようである。もちろんその凄惨な様は、現場を見たものでないと描けないだろう、と思われるほどリアルである。しかし、私はその絵をどこかで見た

⁹ コリアド神父 [1589 ごろ-1641.8] ドミニコ会日本管区長代理 (在任 1621-1622 年)。スペインのカーセレス県ミアハダス町に生まれる。1604 年、サラマンカでドミニコ会に入会。1605 年誓願宣立。1611 年にマニラに渡り、カガヤン盆地の諸修道院院長を歴任。1619 年 7 月に長崎に渡来。有馬、有家、郡 (大村)、長与 (大村)、長崎で宣教。1622 年 1 月、平山常陳の船に乗って捕らえられたフロレスたちの救出に失敗し、厳重な取り調べを受ける。「元和の大殉教」を目撃し、その体験を『日本キリシタン史』の『補遺』に記載した。

¹⁰ <http://www.pauline.or.jp/kirishitanstory/kirishitanstory23.php> (結城了悟、「日本キリシタン物語」23、『Laudate』、女子パウロ会)

ことがある。それはメキシコ市近郊にあるクエルナバカ市の大聖堂の壁画であった。

3. クエルナバカ大聖堂の壁画

クエルナバカは、アステカを滅ぼしたエルナン・コルテスとその一族が長い間住み、エンコメンデーロとして植民地経営を行っていたところで、彼らの住居はコルテス宮殿と呼ばれている。大聖堂は、そのコルテス宮殿の近く、クエルナバカ市の中心にあり、1529年にコルテスの命令で建設された。大聖堂は都市が疫病や戦争などに陥った際、城塞のような役割も果たした。壁画は、危機ごとに石灰で何度も白く塗り直され、1959年になるまで発見されなかった。修復によって発見されたその壁画には、長崎西坂における日本最初のキリシタンの殉教の様子が描かれていた。壁画の中にラテン語で、「皇帝太閤様が・・・のために殉教をお命じになった」と書かれている。

クエルナバカは、日本 26 聖人の一人となっているメキシコ生まれの殉教者フェリペ・デ・ヘススと関係する地である。フェリペ・デ・ヘススは江戸初期の将軍秀忠の時代の「元和大殉教」よりも古い、太閤秀吉による慶長元年 12 月 19 日（1597 年 2 月 5 日）の長崎西坂のキリシタン処刑によって命を落とした殉教者で、メキシコ初の聖人である¹¹。どうやら、クエルナバカの大聖堂壁画は、フェリペ・デ・ヘススを顕彰する目的で元々描かれたようだが、いつ頃誰によって描かれたのかは不明である。フェリペ・デ・ヘススら 26 聖人は、元和大殉教よりも 25 年ほど前に殉教したので、こちらの絵が古く、オリジナルなのかとも思ったが、細部のリアルさは元和大殉教図にはとうてい及ばない。元和大殉教図は実際にみた者でないと描けないグロテスクさがあるからだ。とすると、日本から追放されたバテレン絵師（あるいは修道士）によってマカオで仕上げられ、ローマに送られたこの絵を、どこかの過程で見た修道士・絵師たちが、メキシコ副王領に帰り着いたとき、メキシコ初の聖人フェリペ・デ・ヘススら日本で殉教した 26 聖人たちを顕彰する目的で描いたのではないかと推測される。さらにいえば、壁画には元和大殉教図にはない、長崎西坂での殉教に至るまでの背景が絵物語のようにつづられている。リアルではないが、時間的な流れが大聖堂壁画の両側面に空間的広がりとして多彩な色でしっかりと表現されている。

私はクエルナバカ大聖堂壁画を初めて見たときも驚異と感動を覚えた。それは誰も知らない遠い異国である日本まで行って福音を伝えよう、そのためにたとえ殉教することになっても、その地の血肉となり教えの種を播こう、という殉教者フェリペ・デ・ヘススらの心意気を感じてのことである。また、遠い長崎西坂での 26 聖人の殉教がメキシコ副王領のクエルナバカで偲ばれたという感慨深さや、当時の国際的環境や、異文化接触の葛藤に対し、思いをはせたためである。

しかし、今回の列福式を機に「元和大殉教図」というとてつもなくリアルな絵を初めて見知った。この絵はどこかで見た気がする。そうか、クエルナバカだ！でもどちらの絵がオリジナルなのか、と考えた結果、マカオに日本を追放されたバテレン絵師たちの拠点があったのではないのか（各修道会の東アジア布教の最後の砦であるマカオは全世界へ布教する修道士たちが集まる、かなり国際的な環境だったため）と思いつき、学究的好奇心が刺激されたのである。

同じような理由で、元和大殉教で殉教したメキシコ副王ピリャマンリケ侯爵の息子、ペ

¹¹彼らの列聖は 1862 年 6 月 8 日、当時のローマ教皇ピウス 9 世によるもので、長崎西坂に列聖 100 年を記念して 1962 年に建てられたのが、結城氏が館長をしていた日本 26 聖人記念館である。

トロ・デ・ズニガにも関心がわいた。副王の息子なら、本国の領地やメキシコにも殉教顕彰絵図が残されているかもしれない。そうだとしたら、それは「元和大殉教図」と関わりがあるのか、ないのか。

その追跡は今後の課題として、「元和大殉教図」や日本におけるキリシタン殉教者の研究は、日本キリシタン研究においてまだまだ研究の余地があるところなのではないか、と期待に胸を膨らませている。日本キリシタン研究は歴史も蓄積も長いので、私のような浅学の者がどこから手をつけていいかわからなかったからだ。ちなみに、「元和大殉教図」は年や内容が異なるものが少なくともローマのジェズ教会に三点ある。また、長崎西坂公園の日本 26 聖人記念館には、クエルナバカ大聖堂壁画のコピーも置かれているようだ。

■資料写真：クレルナバカの大聖堂壁画（以下 3 点）



